

Bulletin 2017 3



COLONNADE

特集●JIA 建築家大会 2016 大阪

- JIA 環境会議 2
寺尾信子 寺尾三上建築事務所
- 空き家空き地ミニフォーラム 3
長井淳一 アルキーフ長井淳一建築アトリエ
- 法人協力会員サミット 4
河野剛陽 IAO 竹田設計
- 全国住宅部会連絡会議 5
宮島 亨 V 建築設計室

FORUM

海外レポート

- 「漢江の奇跡」その後 もう一つのソウル—歴史と環境都市への挑戦— 6
安部貞司 日本設計

覗いてみました他人の流儀

- 澤山乃莉子氏に聞く
建築家とリスペクトし合い協業できるインテリアデザイナーを育てたい 8
澤山乃莉子 ロンドンNSDA

温故知新

- 回想 棟梁に学んだ40年 10
深谷基弘 日本大学芸術学部

アーキテクト・ガーデン 2017 建築祭

- アーキテクト・ガーデン2017「社会と共にある建築祭月間」 11
鈴木利美 ダンス建築研究所

委員会活動報告

- 〈総務委員会〉会員拡大WG「会員相談室」が始まります！ 12
宮地洋樹 大宇根建築設計事務所
- 〈交流委員会〉はとバス利用の施設見学会 13
古井弘文 ヒガノ
- 〈建築相談委員会〉印象に残る相談事例から「13/1000の傾斜」 14
中里 昇 中里昇建築設計工房

地域会だより

- 〈城東地域会〉まち歩きマップの作成 15
岸 成行 岸総合計画研究所

部会活動報告

- 〈金曜の会〉シンポジウム「前川国男の現代における意味」を振り返って 16
日高敏郎 日高敏郎建築設計事務所
- 〈再生部会〉2017年部会活動報告 17
柳沢伸也 やなぎさわ建築設計室

日本版CABEを考える

- 仕組みづくりの重要性 18
連 健夫 連健夫建築研究室

選挙公報

- 2017年度役員改選結果 19

BACKYARD

- 広報からのお知らせ 投稿・原稿募集 22
- 映画紹介「沈黙—サイレンス—」 23
立石博巳



笑都物語

繋いできたもの 繋いでゆくもの

2016年10月27日(木)~29日(土)

JIA 環境会議

10月27日(木) 綿業会館 新館2階小会場

JIA 環境会議委員
関東甲信越支部
環境委員会委員長
寺尾信子



10月27日、趣のある綿業会館にて「JIA 環境会議」が開催されました。岡山、金沢に続き3回目、野沢正光前議長も参加され、小玉祐一郎新議長の挨拶により開会しました。

■プログラム

13:00 挨拶(小玉祐一郎)、主旨説明(大野二郎)

13:10 各支部活動報告(司会:栗林賢次)

支部	委員	活動報告
北海道	堀尾 浩	6名のチーム体制により活動の裾野を広げようとしている。
関東甲信越	寺尾信子	唯一環境委員会があり、セミナー・シンポなどを開催、地域会との共催を重視し活動を展開中。
東海	柳澤 力	既設の「住宅研究会」に合流する形で活動を展開、環境セミナーを企画。
北陸	高屋利行	北陸3県が地域会を作って活動中。「省エネと補助金活用」に興味があり、JIA全体に制度活用の提案・推進を図りたい。
近畿	所 千夏	大阪建築部会に環境分科会を作ってシンポ・見学会を企画、ネットワーク作りを重視。
中国	大角雄三	四国支部との共催セミナーを開催、勉強会を経て新講座の開催を準備中。
沖縄	金城 優	蒸暑気候の特質からアジアの建築家との交流を深め、本年はカンボジア旅行を企画。
四国	新居照和	(1)中国支部との共催セミナーを企画。地域との繋がり、文化を大切に活動を考えたい。(2)環境・防災・ICTを軸に2017徳島大会を企画・準備中。(3)2018年ARCASIA大会開催協力。

註)発表順。東北(安達和之)、九州(福田展淳)は欠席。

14:10 RU活動報告(司会:袴田喜夫)

WGはテーマ別にRU(リサーチユニット)に分かれており、それぞれからの報告がありました。

- 環境データ評価RU(寺尾信子)
活動紹介。(JIA環境建築賞タスクフォース分析チーム作業)
- エコハウスフォローアップRU(袴田喜夫)
各自治体は2019年までエコハウスを維持していくことが求められており、3年後のまとめ方が課題。
- 環境建築ガイドブックRU(近角真一)
数年間、準備を重ねてきた本が近々出版される。
- 伝統的工法の住まいRU(篠節子)
国の施策にも関係する注目すべき活動成果をあげた「伝統的工法の住まいRU」の報告を以下に詳しく紹介。

〈気候風土に適した住宅の技術・文化の継承に向けて〉

省エネ法の適合義務化が図られると伝統的木造住宅が建てられなくなるという危惧から、伝統的木造住宅の環境性能・省エネ性能について「伝統的工法の住まいRU」では調査研究を5年にわたり行ってきた。調査の結果をもって、JIAに加え複数の建築関連団体の主催で東京、京都で計3回の公開シンポジウム、2016年2月に衆議院議員会館にてシンポジウムを開催。2月10日の国交省との意見交換会を経て、3月31日に国交省より気候風土型住宅ガイドラインが発出された。ガイドラインの内容は国交省のサイトで調べることができる。意見交換会の意見が採り入れられたことは実務者にとって喜ばしいことであった。今後各地域での「気候風土型住宅認定の策定」において実務者の経験と意見が反映するよう働きかけが望まれ、日本の各地の気候風土に適した住宅の技術・文化の継承の道筋となる。(以上)話し合う内容が多く、時間切れで閉会となりました。

■関連行事の紹介

JIA環境会議の並行企画、恒例の公開シンポのタイトルは「続・建築の魅力とエネルギー性能 ZEB & ZEH + α」。また、金沢大会の続編「ストック活用を環境・保存・災害・まちづくりの視点で考える」が環境・保存再生・災害対策・まちづくりの4全国会議の共催で開催されました。

■連携の連鎖へ

「環境」では「エネルギー問題」「地球温暖化対策」など狭義の環境問題以外に多様な課題があり、広義の「環境」では、他の分野の全国会議との連携が必須です。これらとの連携の連鎖を深めていくこと、さらに、地域支部間の交流を密にしていくことが、これからの環境会議の使命ではないかと改めて感じているところです。

背景:公益社団法人化に伴う組織改編で、活動は各支部で行うことを原則として複数の「全国会議」が発足、支部活動の連携強化を託されています。環境会議10支部各委員は支部の環境活動の牽引役です。一方、理事会との協力で「環境」に関連する対外的な窓口を担うことも求められています。

大会での会議:環境会議は各支部の活動と並行して、支部の垣根を越えたWG活動を進めています。毎月JIA環境会議+WG月例会議をWebで開催していますが、大会における「JIA環境会議」は一堂に会して直接対話のできる重要行事です。

空き家空き地ミニフォーラム

10月28日(金) 大阪市中央公会堂 中集会室

空き家空き地
コンペ WG 主査
長井淳一



10月28日開催の「空き家空き地ミニフォーラム」に、JIA 関東甲信越支部大会 2016 群馬の実行委員長で前支部長の上浪寛氏と参加しました。フォーラムの主旨は「大阪は全国的にも空き家率が14.8%と高く大きな課題であり、この取り組みの一つとして、支部大会において前橋で開催された「空き家空き地コンペ」の成果を取り上げ、行政と共にディスカッションを行い、この問題を掘り下げる」というものです。同時にコンペ入選作品9点を会場内に展示しました。

本フォーラムでは、開催地からのパネリストとして、大阪府まちづくり部都市居住課課長三崎信顕氏、アートアンドクラフト中谷ノボル氏、Office for Environment Architecture 吉永規夫氏が登壇し、大阪地域会会長西濱浩次氏がコーディネーターを務めました。西濱氏より大阪の空き家空き地の現状とその背景について説明があり、三崎氏より大阪府の空き家に対する状況と取り組みについて、中谷氏から流通とマーケットの視点でのストック活用の可能性について、吉永氏からは長屋リノベーションのシリーズ展開事例が発表されました。

上浪氏と長井は、「空き家空き地コンペ」の成果として、「コンペで見えたこと」、「コンペ後の動向」、そこから見えてきた「JIAの役割」の3つの視点を紹介しました。その後、今後の課題と展望、行政および建築家の役割についてディスカッションを行いました。限られた時間の中では少し未消化でしたが、一定の価値観を共有することができたと感じています。

「空き家空き地コンペ」については、『Bulletin』2016年9月号に報告されていますのでご覧ください。本稿では、ミニフォーラムにて紹介した上記3つの視点について述べたいと思います。

■コンペで見えたこと

応募者要件はアンダー40で、2回の現地説明会の参加者は関東圏内を中心に遠くは大阪から140名を超え、32点の応募が寄せられました。いずれもエネルギーで説得力のあるものばかりであり、このコンペが「次世代の可能性を引き出した」といえます。

また、実現に向けた地域や行政へのコミットの担い手の確保、大学との連携や事業者への専門的アドバイス等

を担うという課題が明確になりました。そのためには「建築専門家組織の役割と責任」が問われること、さらに提案者の多様な可能性をつなげ協働に導く「プロデュースの重要性」を確認しました。

■コンペ後の動向

地域の皆様の理解が最優先であり、地元報告会は少し時間をおいた10月15日に開催しました。その間に「応募者間でのネットワーク」が生まれ、意見交換や情報共有等、積極的な活動に発展し始めました。また前橋在住のコンペ参加者が「エリア内の空き室に居住」というホットなニュースもありました。前橋市長からは協力表明があり、「行政とJIAとの協働」が始まりました。

次に本コンペから見えた「JIAの役割」をまとめてみます。

■JIAの役割

- ①居住者の課題を理解し共有する
- ②所有者へビジョンと情報を提供し利益を保護する
- ③プレイヤーのプラン展開を専門家として支援する
- ④行政とは職能シンクタンクとして協働する
- ⑤大学とは実務家として協働する
- ⑥全ての当事者へファシリテーション力を発揮する
- ⑦JIAネットワークを活かし地域を越えて連携する

昨年12月7日に東北支部宮城地域会アーキテクトウィーク2016の「リノベコンペ審査会」において、本コンペを紹介する機会がありました。近畿支部、東北支部においても近く同様のコンペが実施されるとのことです。

最後に、地域の皆様、地元協賛企業様、コンペ参加者、審査員、コンペ主幹の支部大会学術部会、関係者各位に深謝いたします。



パネルディスカッション

法人協力会員サミット

10月28日(金) 大光電機ショールーム

交流委員会委員長
河野剛陽



2016年10月28日、JIA 建築家大会 2016 大阪のイベントとしてテーマ《JIAにもの申す》と題して、協力会員サミットが開催されました。各支部から協力会員が集まり近畿支部が掲げたテーマにしたがって意見交換が行われました。サミットの冒頭では、JIAの筒井信也専務理事からJIAの現状についてのお話をいただきました。

続いて、各支部の現状活動報告がありました。各支部と地域会の関係は支部ごとに違っており、協力会員の活動も支部主体である支部もあれば、地域会主体となるところもあります。近畿支部では、『協力会員活動促進基金』というものをつくり支部正会員の企画する公益事業に対して協賛を行い活動の活性化を図り、正会員、協力会員相互の交流の機会を増やす活動をしていますとの報告がありました。北海道支部は事務所のスタッフ向けの勉強

会を企画しているとのこと、中国支部からは正会員抜きでミーティングを行ったりしているそうです。関東甲信越支部からは、「教えて協力会員」のシステムについての報告をしました。

ただ、共通して、協力会員の活動が会員にどれだけ理解されているかという問題が、どの支部にもあるように感じました。関東甲信越支部で行っている「教えて協力会員」のシステムも、協力会員との接点のひとつと考えており、協力会員の知恵を引き出すツールとなるはずで

会議の終了後は、近畿支部の、『協力会員活動促進基金』を利用しての懇親会が開かれ、よりいっそうの懇親が図れたと思います。各支部の置かれた立場は違うかもしれませんが、それぞれの意見を参考にし、支部内のスムーズな交流が図れればと考えております。



各支部の現状活動報告



報告に耳を傾ける参加者



全国の支部から協力会員が集結



懇親会

全国住宅部会連絡会議

10月28日(金) ELMERS GREEN CAFE

住宅部会部会長
宮島 亨



JIA 建築家大会 2016 大阪において全国住宅部会連絡会議と住宅模型展が開催されました。

各支部の住宅部会（支部によっては住宅研究会等名称は異なる）は、建築家大会の開催期間および5～6月頃の年間2回、連絡会議を開催し可能な限り各支部から集まり、議論や情報交換を行っています。今年度は1回目が昨年6月に福島で見学会も兼ねて開催されました。

連絡会議は、10月28日に ELMERS GREEN CAFE という気持ちの良いカフェで大テーブルを参加者が囲み、ブレイクファーストミーティングという形でフランクに行われました。議論のテーマは大会テーマに沿って近畿支部より提案された「住まいが繋がるとき」。まさに建築家だけでなく社会全体に突き付けられているテーマといえるものでした。

北海道支部からは、住まいの温熱環境を整える技術が住み継ぐためには不可欠であるが、建築費の高騰で、それをどうコストとバランスをとっていかかが難しくなっている最近の問題について報告されました。東海支部からは、繋がるという視点から、最近の特に若い方からの住まいや店舗などのリノベーション相談事例が活発になっていることについて、事例を交えて紹介がありました。また会員の関心の高さから温熱環境についての勉強会を行っていることや、一方、省エネについて考えた場合、外皮計算などのハード的な設えのみでなく、住まい方についても忘れてはならないことなどが話されました。沖縄支部からは、北海道支部と同様に職人不足による建築費の高騰から、これまで比較的ローコストででき

た RC 住宅が、コスト面の問題から難しくなっている現実についてお聞きしました。

関東甲信越支部からは、今年度の対市民向けセミナーでは、改めてデザインとは何かを考えることを意識しており、1) 持続可能な住まいとは 2) 住まいのエネルギーや温熱環境について 3) デザインおよびデザインの力とは 4) (まち歩きを通して) まち並みについて考える、などを切り口としてセミナーやまち歩きを行っていることをお話ししました。建て主の暮らしに寄り添った質の高いデザイン・空間と本当に愛着の持てる住まいについて考えることが、住み継がれる住まいへと繋がると考えている今年度の活動について紹介いたしました。

一方、住宅模型展は繁華街である梅田の地下街を会場とし、全国各支部より出展された50作品程度の模型が展示されました。合わせて各支部ごとに活動紹介のパネルと、テーマ「住まいが繋がるとき」についてのパネルが展示されました。各地域の住まいの事情や、各支部の活動について来場者に知っていただくことができました。このように日常の活動は各支部ごとに行われていますが、横断的な交流を持ち各々の気候や文化を踏まえて議論をする機会はとても有意義であり、JIAであるからこそ可能なことであると改めて思いました。今年度は東北支部と、建築家大会の開催地である近畿支部が議長として尽力して下さいました。次年度は沖縄支部が議長となり、沖縄で全国住宅部会連絡会議が行われることが決まりました。沖縄でも楽しく有意義な交流の機会となることを望んでおります。



全国住宅部会連絡会議 (ELMERS GREEN CAFE にて)



全国住宅模型展 (ディアモール大阪「ディアルーム」にて)

ハンガン 「漢江の奇跡」その後

もう一つのソウル

—歴史と環境都市への挑戦—



安部貞司

久しぶりにソウルを訪れる機会がありました。国の苦難と発展、栄枯盛衰の歴史の証人でもある大河漢江は長雨で水量が増して茶色の急流になっていた。相変わらず日々刻々と都市の姿を変えている感がある。バブル崩壊後、国際競争力や都市間競争力が落ちている日本の都市に対し「漢江の奇跡」後の時間を経て「進化」と「深化」するソウルの新しい風を読み解いてみました。

1980年代のアジアは燃えていた

英国のEU離脱やトランプ新米大統領の動向が目ざれ、今後の世界への影響について注視されている。昨年(2016)5月に伊勢・志摩で主要国首脳会議(G7)が開催された。1973年の第4次中東戦争のアラブ諸国によるオイルショックの危機を克服するべく1975年に仏・ランブイエで5か国(日米英仏独(伊))で始まった会議は42回目となる。その年の日本は、高度経済成長は石油危機で終わりを告げ、トイレットペーパー騒動、大学生の就職難そして田中角栄元首相の唱えた「日本列島改造論(1972)」ブーム。

アジアや中東諸国にも出掛ける機会も多かったが、私が最初にソウルを訪れたのは35年位前。その頃の韓国は「漢江の奇跡」と称される経済成長をバックに建設ラッシュで、漢江の川面に映える東洋一の高さの黄金色の超高層ビル(大韓生命63ビル)は、発展する韓国の象徴だった。87年の民主化宣言や夜間外出禁止解除などで街が明るくなり、人々に余裕すら感じられた。80年代のアジアNIESの韓国、台湾、香港、シンガポールの経済発展は「四国の小龍」とたとえられ、続いて中国やドイモイ政策(1986)のベトナム、マレーシアなど東南アジアが急成長し、世界の経済成長センターといわれアジアは燃えていた。バブル景気の崩壊(1991)やリーマンショック(2008)の金融危機で「失われた20年」と停滞する日本経済を横目にルックイーストと世界中が羨望の目で見ている。

2000年代に入ってBRICSの躍進や最大の輸出相手国の中国の景気減速、ドバイショック(2009)、さらに円安ウォン高などで最近の韓国経済は変調をきたし国政の混迷も拡大が懸念され、不安定化している。

記憶を残す都市・環境にやさしい街

東京を欧米列強にならぶ近代的首都へ改造する「市区改正計画」(1888、明治21)は、オスマンのパリ都市大改造の影響を受けたビスタを重視したバロック的な都市計画といわれる。当時の京城市もパリ大改造の影響を受けて道路を直線化した(総督府、光化門通り=世宗路、京城府庁舎、太平通り=太平路、京城駅)都市が計画された。現在は都市戦略でソウルを環境にやさしい街へ生まれ変わらせ、過去の記憶を未来へつなぐデザインで、伝統と現在そして未来の共存する新たな魅力創造を目指している。

◆清溪川の再生

車中心の都市開発と環境汚染のため、ソウルの象徴的な清溪川は70年代に暗渠化して車道となり、その上を高架道路が走った。それを撤去して親水河川を再生する「清溪川復元」は光化門から東大門まで約6kmが完成し見事に清流を取り戻した(水はポンプで流水)。清溪川はかつて朝鮮王朝遷都の風水地理にさかのぼる由緒ある大事な流れだった自然河川の復元により、歴史的文化遺跡が都市型親水空間の水辺文化を創造し、郷愁の風景の再生と周辺地域の整備活性化にも取り組んだ。

◆環境にやさしい新ソウル市庁舎

ソウル市は再生可能エネルギー利用の義務化では日本より進んでいる。ソウル広場前の図書館は1926年に京城府庁舎(設計は総督府建築課の岩井長三郎)として建てられた旧ソウル市庁舎(1946～)、その隣に建つ新庁



清流を取り戻した清溪川(チョンゲチョン)



太陽光パネル屋根のソウル市庁舎と旧京城(キョンソン) 府庁舎、徳寿宮(トクスグウ)

東大門(トンデムン) デザイン
プラザ (D・D・P)

舎(2012)は再生可能エネルギー(太陽光、太陽熱、地熱など)の利用が28%といわれる。韓国の伝統家屋の軒を引用したガラスデザインの建物は、屋根全体が太陽光パネルで覆われている。

◆東大門周辺の風景再現

ソウルは城門で囲まれた「城内町」で李成桂が1384年に開城(北朝鮮)から首都を移した際に風水思想に基づいて都市建設が行われ、景福宮(1395)や東大門、西大門、南大門、北大門の4大門と城壁が完成した。オリンピックで蚕室スタジアムができるまでは高校野球やプロ野球、サッカーなどが開催された東大門運動場の跡地にはザハ・ハディド氏の設計による東大門デザインプラザ(2014)が建設された。3つの巨大な流線型の個性的な建物と記憶として野球場の照明塔が残され東大門(興仁之門)を中心に歴史文化公園として整備し、漢陽城壁も朝鮮時代の景観に復元された。

◆北村の韓屋保存地区

韓国でのまちの単位は大通りを「路」、そこからの枝道を「街」と呼ぶ、この路と街で囲まれたところを「洞」という生活空間が広がっている。北村は景福宮や昌徳宮の宮殿に近い高台という立地から李朝時代の官僚が住んでいた高級住宅街であった。今でも多くの韓屋(900棟)と家並みが残る地域は朝鮮時代の伝統的地域として保存されている。80年代



北村(ブッチョン)の韓屋保存地区

という生活空間が広がっている。北村は景福宮や昌徳宮の宮殿に近い高台という立地から李朝時代の官僚が住んでいた高級住宅街であった。今でも多くの韓屋(900棟)と家並みが残る地域は朝鮮時代の伝統的地域として保存されている。80年代

にスタートした北村の保存政策は2000年代に「北村づくり事業」として住民主体の活動に移行し「韓屋保存地区」に指定した。一般市民が居住している地域に昔ながらの商店や新しいカフェなどの店が軒を連ねている。

◆モダン都市京城と李朝の情景

日本の統治時代に多くが撤去された李氏朝鮮時代の故宮の再生が行われた。かつて光化門の正面に建っていた旧朝鮮総督府は1995年に解体され、景福宮を復元した。旧総督府庁舎の設計は、朝鮮ホテルや風見鶏の館なども設計したドイツ出身の建築家のゲオルグ・デ・ラランデ(西洋式自邸は江戸東京たてももの園に移築)による。昌慶宮も動物園や遊園地を取り除き復元されたが、園内の韓国初の西洋式温室(1909)は登録文化財として保存されている。明治時代の新宿植物御苑(新宿御苑)の温室に似ている木骨鉄骨混構造ガラス建築は、日比谷公園などの近代式庭園を手掛けた宮内庁の造園家・福羽逸人の設計。この頃に日本で活躍していた外国人建築家も活動を朝鮮、中国、台湾にも展開し、とりわけ韓国での活動は盛んで今も多くの建築が現存し、ウィリアム・メレル・ヴォーリス設計の名門女子大学の梨花女子大学キャンパス(1935)など歴史的背景の雰囲気を実感させてくれる。

均質化しないソウル

ソウル(SEOUL)は漢字では書けない都市だ。李王朝第4代・世宗大王(1397~1450)の時代にハングル文字表記が編み出された。現在の「ソウル」は高麗時代に「漢陽」、李朝時代は「漢城」そして「京城」と呼ばれたが、通称として「ソウル」が使われていた。旧城内の市街「市内」を意味していたともいわれる。財閥ビルや高層ビルが建ち並ぶ近代都市となって街から余白空間が消えているが、表通りを一步入ると間口1~2間の商店が軒を連ね、人々の生活する熱気や人間味、混在・交錯・曖昧化する都市の生命力と多様性を感じる。それは均質化しない社会ともいえる。「韓国」と「日本」というキーワードになると「重苦しい歴史」が浮かび上がる。近代史を物語る場所も再開発で姿を変えているが、見方によっては自己確認と脱日本化でもある。社会正義を重んじる韓国社会は公有財産を資源として単にメモリアルではなく「都市の記憶」を残し、都市文化の醸成を図っている。阪神・淡路大震災(1995)、東日本大震災(2011)を機に議論されている合理化を追求したモダニズム建築を超える思想、建築の価値、場所の使い方のデザイン、歴史的な背景、建築と国家・公共、市民合意など、成熟社会に向けた日本の今日的課題でもある。

さわやまのりこ

澤山乃莉子氏に聞く

建築家とリスペクトし合い協業できる インテリアデザイナーを育てたい



今回お話をうかがうのは、ロンドンをベースに活動されているインテリアデザイナー澤山乃莉子さん。住宅、ホテル等のインテリアデザインから家具デザイン、また企業やホテル、レストランなどのデザインコンサルティングも手掛けられています。近年は日本のプロ向けに、独自に開発したプログラムによるインテリア私塾を主宰し、インテリアデザイナー育成にも力を注いでおられます。(聞き手: Bulletin 編集委員)

——もともとインテリアデザイナーを目指していたのでしょうか。

大学では地理学を勉強し、学芸員と測量の資格を取りました。卒業後、日本航空CAになり、世界の30カ国で約40都市を訪れました。ひと月のうち20日以上がホテル暮らしという環境の中、その魅力に惹かれてホテルに関連したクリエイティブな仕事をしたいと思うようになりました。幸運にもホテル西洋銀座の開設準備室に誘っていただきコアメンバーとして開業に携わり、その後起業してホテルのサービスと人材のマネジメントコンサルタントとなりました。バブル崩壊後ある都内のホテルで250人体制を150人体制にするプロジェクトに関わった際、空間を考えることが非常に重要で、空間心理学を勉強しました。このプロジェクトを2年間かけてやり終えた時に、ちょうど夫の転勤で子供を連れてロンドンに行くことになりました。1995年35歳の時です。

——ロンドンでインテリアデザインの仕事を始めた経緯を教えてください。

ロンドンはインテリアが人々の生活の中の重要な要素であり、大きな市場でもあります。またインテリアを勉強できる場が非常に多いのです。私はいずれホテルの仕事に戻るつもりで、インテリアデザインの勉強をしたら強い武器になると思って始めました。実際やり始めると面白くてどんだのめり込んでいきました。じつは子供の頃からインテリアが趣味で、ホテルコンサル時代にコーディネーターの勉強もしていたのです。ロンドンで学んでみて、日本とはなんて違う世界なんだ、仕事にしてもいいと思いました。約5年間、大学やカレッジで建築、照明学、ソフトファニッシング、デコラティブペイント、アートディレクションなども学び、2001年に起業しました。これらの総合力でインテリアデザインをしています。

——今までの経験が生かされているのですね。

インテリアデザイナーはある程度クライアントのライフスタイルに踏み込まないといけません。ですから、人

生経験とコミュニケーション力に長けていないと難しい職業です。またある意味で、前職に情熱をかたむけていたの方が、ビジネスマンとして別の分野でも成功する人が多いので、これはイギリスでは普通の流れです。

——イギリスでは日本のように新築が多くなく、改修することのほうが多いのでしょうか。

イギリスでは改築9割、新築1割で、ほとんどが改修物件です。築100年を超えたものから値段が上がります。

建物はグレードと環境条例で保護されていて、歴史的な住宅地では景観は変わりません。具体的には、建物に対して1、2star、2というグレードがあります。グレード1は外も中も一切変えてはいけません。すべてを元の姿に戻す修復方法への厳しい決まりごとがあります。

グレード2starは、外観は変えられず、中は許可を得て改装できますが、歴史を反映するエレメントは変えられないという制約があります。改装するときは、English Heritageや市当局、地域の領主Loadの許可が必要で、その申請プロセスに最低半年はかかります。

グレード2が一般的な住宅で、築150年以上であればほぼこれにあたります。中は申請の上で比較的自由に変わることができですが、外観は変えられません。例えばサッシウィンドウにしても、まったく同じ素材で作直さなくてはなりません。多くの決まりごととの戦いです。このグレードは政府の機関が決めていて、毎年更新します。一般的に築年数が100年～150年を越えた建物、全国で約34万戸がこの対象になっています。

——欧州の中でも特にイギリスのインテリアは、格式や伝統が重んじられるのでしょうか。

イギリスでは、インテリアデザインも含めた建築やアートは、人類がつくりあげたもっとも尊いものだという感覚を持っています。ですから、古い建築をリスペクトしながら、新しいものをクリエイトするのがデザイナーの仕事です。新しいことを恐れないし、評価する土壤もできています。その新旧を混ぜ合わせたおもしろさ

が評価の対象になります。イギリスでは住宅を売る時はインテリアデザインが必ず完成していません。ですからインテリアデザインと建築は必ずセットになっています。

——澤山さんの主な活動はロンドンですか。

会社のベースがあるのはロンドンです。年の4分の3はロンドンで、残りは日本です。クライアントは商業系も住宅系もいろいろあります。ここ数年1,000m²を超える新築住宅等を手掛けていますが、グランドデザインは私が描き、その後建築家や構造、積算などのプロとの協業によりプランを完成させ申請に進めます。インテリアデザイナー先行の設計です。

——欧米では、インテリアデザイナーやランドスケープアーキテクトなど、細かく分業されていますね。

イギリスでは建物に対する制約がとても多いので、建築家だけでは手が回らないことも理由のひとつだと思います。分業制だとお互いにもものすごく議論をしますが、そこからしか生まれられない良い形が必ずあって、その瞬間を私は毎回経験しています。ですから、建築家の方たちも、自分たちのスキルだけでは考えつかないことを私たちが示していると認識してくれているのでしょう。お互いがリスペクトして仕事をしているので、このやり方になんの躊躇もありません。

——チームを組むことが当たり前なのです。

イギリスのインテリアデザイナーは空間に始まりフィニッシングタッチまですべて扱えなくてはならないし、それを図面で表現し、法に則りチームを率いてプロジェクトを進め、保険も管理するなど、総合的な手腕が必要です。イギリスのインテリアデザイナーの職能・職域を確立し、維持向上するBIID(英国インテリアデザイン協会)は、約100項目の書類と面接で会員希望者を審査します。これくらい厳しく、またそれが世の中に周知されているからこそ、王立建築家協会(RIBA)とBIIDは協業し、お互いにリスペクトする関係ができています。

——日本のインテリアコーディネーターは家具会社や住宅メーカーに属している人がほとんどです。

現状、日本のインテリアコーディネーターの知識やスキルは非常に限定的です。成果物を見るにつけ、セオリー教育が欠落している事実は明白です。加えて資格を取ってから教育整備が立ち遅れているのが現状です。一方で建築家がインテリアに対して理解があるかというところとも言えない。セオリーや技術を共有できない状況で



The International Design and Architecture Awards 2016で入賞を果たしたロンドンでのプロジェクト。コスモポリタンシティロンドンでヴィクトリア時代の学校建築に、伝統工芸品を含めた和洋折衷空間の創造が評価された。

は、インテリアと建築のプロが協業できないのは当然だと思えます。

これではいけないと、プロを育成するために澤山塾を開き、3期16名の建築士含む卒業生からBIIDメンバーを15名輩出しました。この実績の上に2017年4月からは、すべてのプロを対象としたインターネットコースとして拡大発進します。今後も日本の建築インテリア業界の発展のために、プロの教育と協業の拡大を進めていきます。

——ロンドンオリンピックを経験されましたが、私たちは東京オリンピックで何ができるのでしょうか。

ロンドンオリンピックの真のレガシーは、デザイン、クリエイティブ産業にこそあったと実感しています。イギリスはオリンピックまでの4年間、自国のデザインアイデンティティを確立することにすべての業界とプロが注力し、その結果、デザインは革新的に進化し、クリエイティブ産業は輸出基幹産業の地位を確立しました。ですから、東京オリンピックが文化アイデンティティを明確にする絶好のチャンスと捉えるべきではないでしょうか。

——貴重なお話をいただき、ありがとうございました。

インタビュー：2016年11月14日 東京デザインセンターにて
聞き手：浦 絵美・高橋隆博・清水裕子

PROFILE

澤山乃莉子 (さわやまのりこ)

ロンドンNSDA代表 www.nstda-uk.com

BIID Member(面接官、国際委員)

RIBA Affiliate Member

日本デザインコンサルタント協会メンバー

インテリアデザイナー、家具デザイナー

デザインコンサルタント、インテリアジャーナリスト

プロ向けインテリアメソッド&セオリー「澤山塾」主宰



日英で住宅、ホテルレストラン、家具デザイン、大手の開発事業などを手掛け、2016年6月には歴代8人目となる「BIID Merit Award 2016」受賞。日英での受賞や雑誌掲載も多数。欧州トレンドレポートなど、執筆・教育・講演分野でも活動。日欧の視点からのデザイン各分野への提言を続けている。

*澤山さんは、イギリスの壁紙をアートフレームにして東日本大震災の仮設住宅に敷設する「壁紙アートプロジェクト」を展開しています。詳しくは、<https://wallpaperproject.jimdo.com/>をご覧ください。

回想

棟梁に学んだ40年



深谷基弘

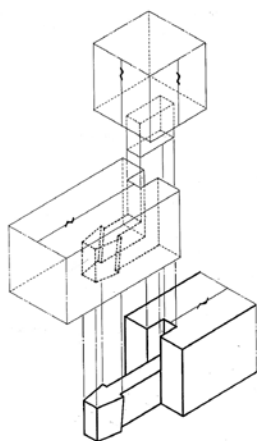
私が「棟梁に学ぶ家」というグループを組織し、伝統的民家の実践と研究に取り組む動機となったのは、昭和56年度日本建築学会作品賞を受賞した“生闘学舎”の建物に出会ったことによる。6,000本の使い古された枕木で作られている建物であり、建築にはまったくの素人集団の手によって7年の歳月をかけて完成させている。大きな切妻屋根に覆われた建物は、まるでヨーロッパの石造建築を思わせるような圧倒的な重量感のある佇まいであった。当時の私は建築の世界に身を置いて6年近くになっていたが、まだ光を見出せない暗中模索の状態にあったが、この建物との出会いは、ある種の共感と期待を抱かせるのに十分なものであった。

それ以来、私は40数年にわたって“棟梁に学ぶ”ことを目標として建築や建築教育に携わってきた。その間、それぞれの段階で棟梁に出会い学んできた。師と仰いだ何人かはすでに故人となられているが、建築を学んだことはもとより、それ以上に間や風土を包括した建築文化を学ぶことができた。私はこれらの教えを“棟梁の技術思想”と位置づけている。

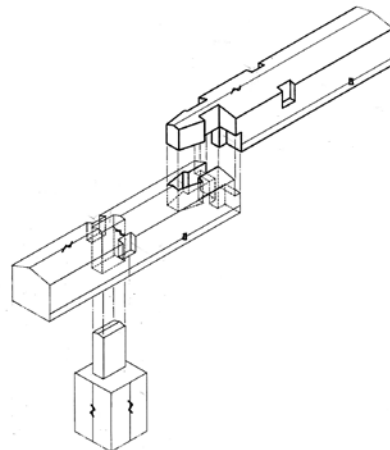
多くの教えの中で、鮮明に記憶に残っているメッセージのひとつである〈大きくても、小さくても一軒は一軒〉という考え方は、棟梁達の丸ごとの生き方を示す建物を

作る原則である。“一軒とは量や大きさ”を言うのではなく“質”であることを物語っている。規模が大きいかから難しい、小さいから簡単にできるという考え方を否定している。時代がどんなに変化しようが、この考え方は時代を超えて継承するものと思っているが、技術革新に伴って発展を遂げている近代が生んだ便利さと容易さを甘受して、ともすれば多くの成果を生み出してきた棟梁達の歴史を切り捨ててしまっている我々に対する警鐘でもある。生産性や利便性、さらには快適性の追求を目的とした社会を生んだという意味では人類に貢献しているが……。

法隆寺や桂離宮をはじめとしたすぐれた遺構を生んだ我が国の木造文化は、世界に誇れるものであるにもかかわらず、あつという間に蚊帳の外に追いやられてしまった。その結果は伝統的なものによって「国籍不明」と称される建築の誕生を招いている。量的、質的に平均化を前提としている現代の技術に対し、人間の身体の中に存在している伝統的技術は価値を対極に置いている。本来、技術というものが時代と人間に結びつくものであるならば、互いに活かされながら共存することが望ましいことである。



土台(男木) 逆鎌(臥鎌)



棟木(男木) 腰掛目違付鎌柄



アーキテツ・ガーデン2017 「社会と共にある建築祭月間」



アーキテツ・ガーデン
実行委員長
鈴木利美

■アーキテツ・ガーデン (AG) とは 社会と共にある建築祭月間



昨年度の ARCHITECTS GARDEN
2016 のチラシ

JIA 関東甲信越支部が主催するアーキテツ・ガーデン (以下、AG) は、建築家や JIA の多彩な活動や価値を広く社会に対して情報発信することを目的に 1990 年代にスタートし、以降、途切れることなく続いています。当初は、東京を中心として展覧会、講演会、懇親会などを開催していま

したが、2012 年に大きく変化。開催時期を“建築家の日”である 6 月 15 日を含む 6 月いっぱいとし、県域を含めた各地域会主催の多くのイベントによる広域的ネットワーク事業、そして東京での主イベントの 2 本を主軸とする現在のスタイルへと変化しました。

今では、JIA 会員、他関係の皆様のご尽力のもと、各地域会、委員会、部会のさまざまな活動がこの 6 月、1 ヶ月の間に多く実施されることで、着実に社会、市民に根付き、それが建築文化の普及と JIA・建築家職能の認知に繋がってきていると感じます。

今年度の AG2017 に求められているのは、社会に向けた建築文化、建築家職能のさらなる情報発信と支部内部の活性化、会員のための研鑽・交流の機会と捉えます。

■アーキテツガーデン (AG) 2017 建築祭

そのような流れを受けて、AG2017 は下記、2 つの方向性と 3 本の柱を趣旨とし、6 月いっぱいの開催と致します。

- 社会に向けて、建築文化の普及と建築家職能・JIA の活動をアピールする
- JIA 内、建築業界内において、改めて建築を捉え・考える

① 建築文化の普及と建築家職能・JIA の活動をアピール 「支部全域での、多くのイベント実施」

昨今の AG での各地域会・委員会・部会による多くのイベントは、社会に向けた建築文化の普及と建築家職能・JIA の活動をアピールする“要”となっており、着実に社会、地域に根付いてきていると感じられます。したがって、引き続き実施していただきたいと考えます。

② 支部内の活動発表と連携 「委員会サミット」

一方で、支部内部を見ますと、各地域会・委員会・部会、そして会員、関係者がそれぞれに活動をし、横断的なつながりがあり図られていない状況があります。社会への発信力を高めたり、各々の内容を広く深く掘り下げるためにも、交流や連携を図ることは効果的かつ重要です。2016 支部大会での地域会間の交流・連携に続いて、AG2017 においては、委員会活動の情報交換、会員、関係者への発表の場を設け、交流を促進し連携に繋がっていただきたいと考えます。

③ 建築を改めて捉え・考える

メイン・シンポジウム「建築的思考の可能性」

Social innovation が進む時代にあって、建築も社会の一部として例外ではありません。社会において建築や建築家が“どう捉えられているのか、どう必要とされているのか、何ができるのか”、そんなことを改めて、そして常に問うていかななくてはいけない時代ともいえます。

その際に、どの時代でも必要とされ、そして多様に活かすことができるであろう「建築的思考」がキーとなりえるのではないのでしょうか。パネラーには、従来の建築設計監理業務に留まらず「建築的思考」をもって先進的に幅広く活躍されている建築家、そして他分野からも先進的かつ「建築的思考」と共通する何かを持たれている話題の方々に登壇いただき、その可能性について幅広く掘り下げていきたいと考えます。

アーキテツ・ガーデン 2017 建築祭

●今後のスケジュール(予定)

2月 1日	イベント募集スタート
3月 10日	イベント申込み締切り
3月末	WEBサイト公開
4月 15日	『Bulletin』5月号にて、メインイベント他、詳細発表
4月 20日	リーフレット完成・配布
6月	実施

総務委員会

会員拡大WG

「会員相談室」が始まります！



総務委員会
会員拡大WG
宮地洋樹

支部総務委員会の会員拡大WGでは、会員拡大の方策についてさまざまな角度から検討を行っています。その一つとして会員サービスの充実を目指し、これまでになかった会員向けの相談室として、ベテラン会員による「会員相談室」の立ち上げ準備を進めてきました。

これは昨今、建築家を取り巻く環境がますます厳しくなる中、身近な相談相手を得る機会が少なく、悩みやトラブルを抱えやすい若手および中堅会員を支援することを目的として、そこにJIAに多数在籍するベテラン会員の豊富な知識や経験を活かしてもらおうというものです。

相談内容は設計監理に関する技術的アドバイスや業務上のトラブル対応、設計図面のテクニカルレビューから事務所運営等につまわる悩みまで幅広く受け付け、相談員として登録いただいている経験豊かなベテラン会員が無償で対応します。相談は事前の申込み制とし、毎回2名の相談員が直接面談方式で応じることを基本とします。

昨年5月と9月の2回にわたって実施した試行では、寄せられた相談はどれも頷けるもので、それぞれ適切なアドバイスを得られて相談者の反応も上々だったことから、この取り組みへのニーズと手応えを確認できました。

相談することですぐに問題が解決できればそれに越したことはありませんが、まずは誰かに話を聞いてもらうだけでも状況を整理でき、何かしら筋道が見えてくるものです。その意味では相談を持ち込む際の敷居を下げる工夫と、持ち込まれた相談への速やかな対応が運用上のポイントだろうと感じています。

現在、早期の本格運用開始に向けて詳細を詰めている段階ですが、この取り組みを多くの方に知っていただくため、試行の感想等を相談者、相談員それぞれの声として以下に紹介します。相談のお申込み方法は『Bulletin』誌上や案内チラシ等で近日中にお知らせする予定です。必ずお役に立てると確信します。ぜひご活用下さい。

● 相談員の声

長谷山 純

「もっと早く話がしたかった」が相談者・相談員双方に共通する印象でした。

事務所の資金繰りから施主の変更への対応、現場での納まりや法解釈の難しさ、追加工事費の処理等々、私自身トラブルや悩みが絶えない。大抵の場合は先輩や後輩達に助けられてはきたが、時には相談する時間もなければ言葉を整理するのも億劫になるし、内容によっては恥ずかしいとか情けないとか、親しいからこそ打ち明けられないことだってある。そうなるとうるさい曇り空の下で何週間も何か月も憂鬱な日々を過ごしてしまう。

時間が解決してくれることもあるが、誰かの一言二言で雲間から光が差し込んでくる瞬間が何度もあった。

幸いJIAにはさまざまな経験を積んだ多くの仲間がいます。とにかく早期にアクセスして顔を合わせ、話をすることが解決への第一歩だと思います。この相談室がJIA会員相互の、そして世代間交流のきっかけになることを望みます。

● 相談者の声

正会員 51歳

ほんの些細なことであったとしても、普段仕事をしていると悩むことも多く、そのたびにJIAの中に気軽に相談できる先がなぜないのかと思っていました。会員相談室試行の案内を見つけて、早速竣工直後のトラブルについて相談しましたが、経験豊富な相談員のアドバイスで解決の道筋がいただけました。アトリエ事務所を主宰する若手会員にとっては、ベテラン揃いのJIAならではの有り難い取り組みだと実感しました。

● 相談者の声

ジュニア会員 36歳

私の相談内容は、事務所を開設したばかりの私が持つ、小さな不安の吐露でした。相談者の御二方にはとても瑣末な相談だったのかもしれませんが、しかし、そういった相談にも真正面から応えていただき、相談時間を一杯使い彼らの経験と知見をうかがうことができました。時間を置いて2回の相談ができるなど、また話を聞いてもらえるような機会があると、なお良いのではないかと考えています。

交流委員会

はとバス利用の施設見学会

—皇居ドライブ～靖国神社～国会議事堂—



交流委員会
法人協力Dグループ
Dグループ幹事
ヒガノ株式会社
古井弘文

2016年11月1日、東京駅丸の内南口より「はとバス利用の施設見学会」を行いました。日本設計の廣瀬浩二氏にご参加をいただき、総勢15名です。一般のツアー参加者を含め「はとバス」は満員御礼。3時間ツアーのスタートです。はとバスの車窓は通常の乗用車より2m高いので、見える風景が普段と違って迫力満点です。

皇居外苑は、昭和24年に旧皇室苑地の一部が国民公園として開放されました。内堀通り楠木正成像側は、芝生の中に入ることもでき、歩道にはベンチも設置されランチタイムを過ごすことができます。

内堀通りの皇居前広場には、多くの御影石のポラード(通称ラウンドロック)があります。平成11年に二重橋前広場、平成14年に皇居前広場に警視庁と環境庁が車輛阻止用具として設置したものです。

皇居外周路は、皇居ランニング略称「皇居ラン」として日本で最も有名なランニングスポットとなっています。2007年東京マラソンを機にランナーも増加して、多い日には1万人を超える人が走っています。このコースには信号機がなく、1周約5キロでランナーにとって計測しやすい。さらに公園内に公衆水洗トイレと水飲み場もあり、オーソドックスなコースでありながらランナーに優しい



皇居前広場の御影石のポラードとランナー

人気のランニングコースと言えますが、皇居ランナーの増加により、ランナーと歩行者および自転車のトラブルが急増していることも事実です。

いよいよ靖国神社の参拝です。靖国神社は、明治2(1869)年6月29日、明治天皇の思召しによって建てられた東京招魂社しょうこんしゃが始まりです。明治12(1879)年に靖国神社と改称され147年が経過し、3年後には150年記念行事が行われます。

大鳥居から広がる大イチョウ並木が圧巻です。少し時期が早く紅葉を観られず残念でした。靖国神社のイチョウは都内イチョウ並木名所8選に選ばれています。

鳥居は木材で造られた「木鳥居」や石で造られた「石

鳥居」が一般的と思われますが、靖国神社の大鳥居(第一鳥居)は鋼管製で、柱の高さが25メートル、笠木の長さ34メートル、重量は100トンあり、震度7の地震や風速80メートルの強風でも壊れないと言われています。靖国神社の大鳥居は雄大です。

最後の見学場所は国会議事堂です。国会議事堂は昭和11(1936)年に帝国議会議事堂として建築されました。建築設計は明治時代を代表する建築家・辰野金吾。辰野金吾は日本銀行本店、東京駅も設計。「建築家になったからには、生涯この3つを設計したい」という野心があり、その3つ目が「国会議事堂」です。

建物は左右対称になっており、写真右側が衆議院、左側が参議院です。見学当日は緊急会議のため参議院本会議場の見学のみになりました。外装には広島県倉橋島の「桜御影」と呼ばれる桜色の御影石が中心に使われています。建築材料は一部を除き純国産が使用されています。国会構内の前庭には遊歩道があり、その両側に「都道府県の木」が植えられています。昭和45(1970)年の議会開設80周年を記念して、各都道府県から贈られた県木が見られます。

駆け足での紀行文となりましたが、身近で歴史ある建築物を見学できました。2020年東京五輪開催もあり、訪日外国人旅行者数が2400万人を超える時代。「はとバスツアー」は身近で、観光立国に貢献する観光バスツアーであると実感したことを記し、本文を締めくくります。



国会議事堂の前で集合写真

建築相談委員会

印象に残る相談事例から
「13/1000の傾斜」

建築相談委員会
埼玉建築相談室長
中里 昇

相談事例「13/1000の傾斜」

●相談内容

平成23年に30代のご夫婦が中古住宅を購入した。内外共にリフォーム済みの建物は、見た目には問題なく何よりも環境に惚れ込み決めたようだ。全ての手続きを終え新居に家具を設置した時に、床が傾いていることに気がついた。どうしたらよいのか分からず相談に来られた。

住宅は平成5年に新築された在来軸組木造2階建、直接基礎、延べ93㎡。相談者はできることなら契約を解除したいとのこと。まずは現地調査をすることになる。

●敷地の状況

土地の東側は水路に接し、鉄筋コンクリート造の擁壁があり2.7mの高低差がある。西から東に向かい低い傾斜地に盛り土をし、造成された敷地と推測する。接する道路にも東側に向かい陥没している部分が見られた。またコンクリートブロック塀の一部に土の移動で発生したと思われる3cmほど隙間が見られた。

●建物の傾斜

家の中に入ると歩行感覚で床の傾きを感じられた。水平器、下げ振りなどを使用し簡単な計測をすると、床の傾き、柱の傾きは尋常ではないことが確認できた。今後の方針を定めるには正確な測量が必要であることからコンサルタント契約を結ぶ。後日、測量士による測量で詳細なデータが取得できた。それによると、床面、基礎天端の水平および外壁垂直ともに12～13/1000の傾斜があり、いずれも東水路方向に下がっていることが判明した。

この住宅の売買に当たり、依頼者は住宅ローン「フラット35」を利用していた。利用条件に中古住宅適合証明が必要だが、その技術的基準、劣化基準として「壁、柱、居室の床が6/1000以上傾斜していないこと」と表記さ



北面外観

敷地の東側の水路、右が敷地

れている。これらから明らかなように、13/1000の傾斜は異常値であり、その原因は盛り土の圧密沈下による不同沈下と結論づけ、このままでは精神的、身体的に害がおよぶ恐れがあるので早急に対処する必要ありとした。

●改修工事が契約解除か

過去に経験した不同沈下の改修工事からすると、地盤調査、アンダーピニング工法による水平化、その後のゆがみ調整、補修工事などを考慮し改修工事予算は1,000万円程度は考える必要がある。ならば依頼者の要求する契約解除が可能なのか。

民法に債務不履行による契約解除とは「契約を締結した目的を達成できない程大きな不履行」のある場合とある。果たしてこれに該当するのか。この先は多分に法律の絡む内容であり私には判断できないため、私の作った報告書を持って弁護士に相談することを進めた。

●社団法人埼玉県宅地建物取引業協会(当時)の協力

一向に応じない販売業者に大きな不満を抱える依頼者は、県内の宅地建物取引業協会の相談窓口を訪ね、調査報告書を提示。改めて私の面談での説明を求められた結果、当の販売業者を説得できたようで、後日「契約解除」の知らせが業者から届いた。支払金額は全額返金された。引越し費用までは取り戻しできないようであったが、依頼者の現物確認の失点を考えると仕方がないとも思える。

この相談例は比較的明確な数値を伴う欠陥であったこと、原因の判断がしやすい内容であったことがすっきりした結果をもたらしたと思える。

埼玉相談室の現状

平成10年4月に開設された埼玉相談室も早くも19年を迎え、相談受付件数は1,700件を超えた。現在11名の相談委員が対応し、月に2会場、計9件の相談に応じている。紹介元は県内各地の消費生活支援センターからが最も多く、次に行政建築係、住宅リフォーム支援センター等からとなる。現地調査にも対応できることが広く伝わり、調査目的の相談もあるが、でき得る限り相談会の中で完結することを目指している。

城東地域会

まち歩きマップの作成



城東地域会
代表
岸 成行

城東地域会は東京都の東部7区(台東、墨田、江東、荒川、江戸川、葛飾、足立)にまたがる地域会である。このように広域でありながらアクティブメンバーはわずか10数名程度である。メンバーの空白区も複数ある。行政への対応と言っても区役所は7つあるので、この人数ではとても手がまわらない。7区のいずれにおいても同じような密度で活動することはできないので、活動が偏ることは致し方ない。しかし、広域地域会だからこそできる活動もある。例えば、隅田川周辺の景観など複数の区にまたがる広域の課題を考えたり、木密地域の防災など共通の都市的テーマについて、各区を比較し考えることなどは、城東地域会ならではの活動といえる。

これまでの活動を振り返れば、「水辺」、「木造住宅密集地」をテーマにした調査と講演会の開催、残したい風景を見て歩く一般参加のまち歩きや、子供空間ワークショップの開催等を行ってきた。そのなかで、昨年度からは、「城東地域会まち歩きマップ」を作成するための調査を続けている。もちろん魅力的な建築や貴重な歴史的建造物もマップにプロットしたいが、むしろ、城東エリアの元気な商店街や残したい昭和の町並みなど、単に建築や景観に留まらない下町の暮らしや文化に関わる風景を見て歩くマップを作ることを目標にしている。

これまでに、次のエリアについて調査を重ねた。

- ・墨田区南部(錦糸町より北斎通り界限を通り両国へ)
- ・墨田区北部(言問橋から向島百花園を見学して曳舟へ)
- ・江東区西部(清澄白河から深川を散策して門前仲町へ)
- ・台東区南部(浅草橋から鳥越神社界限を抜け御徒町へ)
- ・台東区西部(日暮里から朝倉彫塑館を見学して上野へ)

幹線道路を歩くだけではわからない、あるいは既存の建物、文化財ガイドブックを見て訪ね歩くだけではわからない町の魅力を紹介したい。例えば、台東区の南部には戦災で被災しなかったエリアが広がる。もちろん幹線道路に面した商業地域ではマンションへの建て替えが進むが、その背後には木造2階建て出桁造の商家が並ぶ。幹線道路の背後には下町商店街と町工場が混在し、魅力的な町が広がっている。かつての復興小学校を起業家のものづくりアトリエに再生したりと、都市型地域活性化のモデルもある。また、江戸時代の切り絵図を広げるとかつての掘割から現在の町割りへの連続性も見えてくる。眼前の今の風景を見ながら、過去の風景を思い浮かべることが出来る。そんなマップ作りを考えながらまち歩きを重ねている。

今年はそれを形にしたいと考える。



台東区に残る木造住宅



台東区の商店街「鳥越おかず横丁」

金曜の会

シンポジウム

「前川国男の現代における意味

—没30周年を迎えて—

を振り返って



金曜の会
部会長
日高敏郎

昨年12月9日に建築家前川国男が没して30年目に当たるのを記念して金曜の会でシンポジウムを行った。前川国男の建物に関心をもつ人や前川建築設計事務所のOBの皆様など多数の方々に参加していただいた。社会的にも意義深いため、今回、この誌面を借りて振り返ってみたいと思う。

パネラーには作家で編集者の森まゆみ氏、建築家青木淳氏、建築史研究家松隈洋氏の3名を招請し、司会進行を金曜の会顧問大宇根弘司(元JIA会長)が務めた。

プログラムは、1.パネラー各20分のレクチャー 2.フリーディスカッション 3.質疑応答で構成した。その中で森氏は、自身の幼少の頃親しく馴染んだ東京文化会館から受けた多くの感動を語り、子供の頃に前川国男の作品に限らず優れた建築に出会うことはとても大切なことだと強調した。

青木氏は、今回、東京文化会館を例にとって前川国男がどのような思考を経てプランを作成していったのか、その思考過程を青木自身のスケッチを動画で流しながら分かりやすく分析してみせた。特徴的なことは平面の増殖のさせ方であり、本来脇役の動線や階段を佇みたくなる主役として設計していると指摘した。また、東京文化会館の裏手にある出待ちの壁は多くの落書きで埋まっており、出演者が待ちの時間にサインをしたものである。これは建物の宝であり、落書きしてもらえる建築、スキのある建築、つまり完結しない建築の魅力であり、前川国男の建築はこの包容力を持っていると指摘した。

松隈氏は、前川国男の思想が何に基づいているのかについて資料をもとに語った。まず大学卒業までの期間では①内務省の技術者で信濃川の治水に携わった父親からの影響、②東京大学での岸田日出刀との出会いとフランス



パネラーの皆さん 左から森まゆみ氏、松隈洋氏、青木淳氏

の芸術への関心と知識の深耕、③卒業論文の構成が示すル・コルビュジエへの強い思い。そして前川国男は卒業式の夜、コルビュジエのもとへ旅立つが、在仏2年間で彼が学んだことは①平面計画の重要性、②建築はさまざまな要素が統合された全体であること、③住宅問題等の社会的テーマが自分たちの目標にあること、④工業化はそこから派生してくるもの、⑤活動を妨げる勢力との戦いは避けられないこと、等々。そして日本に戻ってからレーモンドから「自分たちが目指しているものは日本の生活の中にある」ということを学んだはずであると松隈氏は考える。その他にも自邸や個々のコンペ、CIAMでの活動など多くのことを語っていただいたが、ここでは割愛する。

以上述べた通り、三者三様の切り口で前川国男の建物、思考方法および思想について語っていただいたが、テーマである「前川国男の現代における意味」については一概に答えの出るものではない。ただ質疑応答で会場の前川建築設計事務所長橋本功氏から、観光庁へ申請していた前川建築を中心とする近代建築ツーリズムネットワークの補助金申請が認められ、今年から活動が展開していくことになったとの報告がされた。その活動の狙いは継続／保存と長く使うための予算化の実現とのこと。そして前川建築の先には地域の建築を大切にする大きなテーマがあると強調された。

青木淳氏はこれに関連して、「保存は難しいが、変えざるを得ないところはその都度変えていきながら使い続けることが結局オリジナルを残すことになると思う」と語った。この活動の中に「前川国男の現代における意味」を考える重要な要素が潜んでいるのではないだろうか。



左：前川建築設計事務所
橋本所長
右：司会 大宇根弘司氏

再生部会

2017年部会活動報告



再生部会
部会長
柳沢伸也

1998年に設立された再生部会は、2015年にJIA本部の組織改編に伴い、関東甲信越支部所属として位置付けられました。全国的な組織として活動しています。歴史的に価値ある建物を長く使い続けていくために、技術的・法的な面からさまざまな検討会を、毎月、関東甲信越支部に所属するコアメンバー20数名を中心に行っています。

2016年度は、約3年間にわたる東京弁護士会歴史的建造物部会との共同研究「既存建物を使い続けるための諸制度見直し研究」の総まとめを行い、『今、ある良い建物をこれからも使い続けていくために』というパンフレットを発刊しました。建築基準法第3条の規定をうまく利用すれば、わが国でも欧米諸国のような基準や方法で、歴史的建築物の保存活用が実現できることを提示しました。この研究会活動は、文化庁や各自治体などの外部団体からも評価され、公益財団法人トヨタ財団より研究助成も受けています。



東京弁護士会と共同で作成したパンフレット

また、大震災や大火災が相次ぐ近年、価値ある歴史的建造物は失われつつあり、保存すべき建造物のデータベース構築が緊急課題となってきました。昨年は、再生部会の作成してきた「未来に残したい20世紀の建築」リストが、建築学会の『日本近代建築総覧』と合わせて、文化庁の保存再生を進めるための近現代建築物リスト(データベース)として採用されました。今後も、文化庁の進める調査事業に協力する形で、建築学会や建築士会連合会とともに連携し、データベースの拡充に努めていきたいと考えています。

JIA建築家大会2016大阪では、JIA近畿支部保存再生部会の協力により、「近現代建築再生の課題」というテーマでシンポジウムを開催しました。JIA近畿支部の吉村篤一氏および窪添正昭氏が登壇し、関西地区の失われつ

つある価値ある建物の事例について報告があり、関西独特の再生手法について問題提起がなされました。京都工芸繊維大学の笠原一人先生からは「オランダにおける近代建築の保存再生」について先進的な事例紹介があり、今後、我が国が手本とすべき再生手法について紹介がありました。また、東京弁護士会歴史的建造物部会の小澤英明弁護士および再生部会副部会長の鯉坂徹氏からは、建築基準法第3条の規定をうまく運用すれば、歴史的な価値を失わないまま使い続けることのできる法的枠組みが可能との紹介があり、近現代建築物の保存活用の可能性が議論されました。

シンポジウム後の大阪まち歩きでは、近畿支部の方のガイドのおかげで、普段体験することのできない貴重な大阪のまちを体験することとなり、志を同じにする全国の方々と連携することの重要性を感じました。

2017年度は、歴史的建築物を使い続けていくための建築関連の法的枠組みの研究に加え、先駆的な専門家を講師に迎えレクチャーを行ったり、先進的な保存再生事例について見学会を行ったり等、アクティブな活動を行っていきたいと考えています。

建築を使い続けていくことの重要性を社会へ訴え、より豊かで美しく安全な都市と建築の具現化に貢献することを目的に、今後も活動していききたいと思います。



JIA建築家大会2016大阪における再生部会主催のシンポジウム風景

仕組みづくりの重要性

JIA 建築家大会 2016 大阪、フォーラム

「ストック活用を環境・保存・災害・まちづくりの視点」を通して



JIA まちづくり会議
議長
連 健夫

JIA建築家大会2016大阪で、10月28日、「ストック活用を環境・保存・災害・まちづくりの視点で考える」フォーラムが100名を超える参加者の中で行われた。このフォーラムは環境会議、保存再生会議、災害対策会議、まちづくり会議のJIA4会議合同主催の分野横断的企画である。つまり、ストックをテーマにして4つの視点で掘りさげる意図である。日本のストックの都市問題として「個人のストックが社会のストックになっていない」状況があり、これを解決するアイデアが求められている。

環境の視点から井口直巳氏は「サステナブルをエネルギー以外でも考えよう」として、古材利用や病院建替の事例を紹介しながら、ストックを活用するためには、建築への愛着、機能の維持、社会コスト、という3つのハードルがあると説明された。近角真一氏は「ストックの視点から見た環境建築」として、リユースやリサイクルによりCO₂の排出を減らすことができること、建築の長寿命化が地球環境に優しいことが説明された。保存再生から篠田義男氏は「JIA保存再生活動・全国での連携」として、文化財ドクターの建築遺産という価値あるストックを残す活動、専門家養成の仕組みである修復塾の内容と共に、建築学会や建築士会など他団体との協働の大切さを指摘した。氏家清一氏は「文化財ドクター派遣・その後の展開」として、ドクター派遣の具体的プロセスとフォローアップ調査から、くりはら田園鉄道公園における資料館の設計に繋がっている事例を紹介された。災害から水野宏氏は「災害のためのストック、災害からのストック活用」として、熊本地震の経験から人材、仮設住宅、避難所のストック活用という視点の大切さ、課題として現状の補助金制度が修復ではなく解体行為にすぐに結びついてしまう問題を指摘した。佐々木文彦氏は「地域復興の中の古民家の再生と活用について(宮城での事例)」として、日本民家再生協会における民家バンクの仕組みと事例を紹介された。この仕組みの中で民家を利用したい人と民家を利用してほしい人を繋げており、そこに建築家が関わり修復や改修をしているところがポイントであると説明された。まちづくりから黒木正郎氏は

「木密地域におけるストック活用を考える」として、東京三会建築会議で作った小冊子『東京構想POST2020』を用いて、東京の都市の特徴と共に、既存木密住宅を災害時には仮設住宅、平常時は民泊施設などに利用する提案を説明した。筆者からは「ストック活用における日本版CUBEの可能性」として、英国のCUBE(建築まちづくり機構)という、良質や美しいという定性的判断を取り入れる仕組みを紹介すると共に、日本でのCUBE的活動として、赤坂通りまちづくりの会の事例を通して協議調整の機会を作ることの大切さを指摘した。

ディスカッションでは、これら4つの分野横断的視点でストック活用の課題が話された。この中でストック活用は誰でも必要と考えているが、それをドライブするためには仕組みづくりが大切であること、この仕組みをつくるためには、外から建築家がどのように見えているかということ意識する必要があること、仕組みづくりのために他会との協働が有効であること、仕組みの中で適切な報酬を生み出すことなどが挙げられた。コメントとして、六鹿正治会長が、「ストック活用はハードな建物のみならず、人や文化、歴史を含めたトータルな意味で既存の良さを活かしていく姿勢が大切であり、それには総合的な能力が必要で、これこそ建築家がやるべきものである。市民参加の街づくりや再開発においても総合的な能力が問われる状況で、今後ますます建築家という職能が求められる世の中になる。そのためにはオープンな気持ちで自己研鑽をする必要がある」と締めくくった。



「ストック活用を環境・保存・災害・まちづくりの視点で考える」フォーラムの様子

公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部

2017年度役員改選結果

選挙管理委員会 委員長 阿部一尋

第2回告示：2017年2月15日

2017年度役員改選に関し、12月5日に第1回告示を行い、1月12日の締切日までに提出された届出書について、1月23日の第2回選挙管理委員会で、役員選出規約並びに役員選挙細則との適合を確認し、立候補者名簿に登録いたしました。その結果、立候補者数が定員と同数であったので、役員選出規約第3条3項により、立候補者全員が幹事候補者および監査候補者として選出されました。

なお、選出された候補者は、役員選出規約第2条2項および5項により支部総会で選任されます。

幹事候補者



神奈川地域会 中澤 克秀

(なかざわ かつひで / 1965年2月7日生)

●推薦者 飯田善彦

- 略歴：
 - 1965年 静岡県富士市に生まれる
 - 1988年 工学院大学建築学科卒業
 - ATELIER ZELKOVA (戸設計事務所・杉並) に就職
 - 1994年 中澤建築設計事務所開設
 - 2007年 (公社)日本建築家協会関東甲信越支部入会
 - 2012年 神奈川県横浜市金沢区に事務所を移転 神奈川地域会に所属
- 所信：2007年に日本建築家協会関東甲信越支部入会と共に、支部広報委員会、本部広報委員会、AG大会やUIA大会、横浜全国大会などの実行委員会で活動してきました。また、住宅部会に所属し、第34代住宅部会長を務め、セミナーなどの活動により一般市民と建築家の繋がりがや職能について取り組んできました。2012年に横浜へ事務所を移転した折、神奈川地域会に所属し、今後はより地元での活動に力を入れようと、このたび、神奈川地域会からの役員枠で立候補することになりました。よろしくお願致します。
- 推薦：中澤克秀さんは、これまでも、住宅部会や広報などの活動を通して、建築文化、地域社会に大きく貢献されてきました。今後も神奈川との関係を含め、執行部の役割を十分に果たして頂くことを期待し、幹事に推薦いたします。(飯田善彦)



千葉地域会 星野 治

(ほし の おさむ / 1952年11月2日生)

●推薦者 榎本雅夫

- 略歴：
 - 1952年 千葉県生まれ
 - 1977年 明治大学工学部建築学科卒業
 - 1979年 明治大学大学院修士課程修了
 - 1979年 (株)潮建築設計事務所勤務
 - 2012年 (株)潮建築設計事務所代表
- 所信：私は、JIA千葉地域会の幹事として、2015年4月より1期2年の任期を務めさせていただきます。このたび、千葉地域会の榎本代表より2期目の推薦をいただくことになりました。地元地域会では、業務委員会に所属して、主に公共建築設計における業務環境の改善に取り組んでいます。1期目で掲げました「他の地域の業務環境や活動状況の把握」がまだ十分にできておりません。次の機会を得ることができたら、頑張りたいと思います。よろしくお願いたします。
- 推薦：星野さんは千葉地域会副代表として、日頃より熱心にJIA活動に取り組まれています。更に支部マターについても持ち前の高い倫理感・責任感を活かし、貢献できるものと確信しています。(榎本雅夫)



栃木地域会 慶野 正司

(けいの まさし / 1957年1月1日生)

●推薦者 阿久津新平

- 略歴：
 - 1979年 関東学院大学工学部建築学科卒業
 - 1981年 アトリエ慶野正司一級建築士事務所設立
 - 1993年 JIA入会、後に地域会幹事歴任
 - 2011年～2014年 栃木地域会 代表
 - 2015年～現在 本部理事、関東甲信越支部副支部長、栃木地域会幹事
- 所信：公益社団法人化したJIAの社会における責任と期待が多様化しつつあるなか、建築家としての知見を高め、職責を果たす職能団体としてより効果的な運営が求められています。首都圏の地方地域会に所属する者として、今日までの活動を踏まえ今後のJIA活動の一端を担って参りたいと思います。
- 推薦：慶野さんは地域会幹事として又支部理事として活動してこられました。引き続き地域会幹事として活動していただきたく推薦いたします。(阿久津新平)



群馬地域会 小林 光義

(こばやし みつよし / 1969年9月6日生)

●推薦者 飯井雅裕

- 略歴：
 - 1992年 工学院大学建築学科卒業
 - 1992年 (株)銭高組勤務 建築部 (建設現場→CADセンター) 1.5年→設計統括部2.5年
 - 1996年 (株)羽鳥設計勤務
 - 2002年 (有)アーキズムあすか設計設立
 - 2003年 (株)アーキズムあすか設計へ変更、現在に至る
- 所信：建築行為は個人住宅といえ公共的要素を持っていると考えています。これまでJIAの活動を通してよりその重要性を認識するとともにより意識をするようになりました。公益社団法人となった現在、建築業界におけるJIAの存在はますます重要なものになると思います。これからもJIAと共に、建築と公共を考え行動していきたいと思っています。
- 推薦：群馬県を中心に優れた建築を多数設計されている人物です。そして、JIAでは地域会の活動はもちろんのこと、支部の委員会などに積極的に参加されています。地域会では委員長や建築祭実行委員長など様々な事業を担当し、現在は副代表を務めています。建築家の社会に対する役割を常に考え行動されている方で、幹事に相応しいと考え推薦いたします。(飯井雅裕)



山梨地域会 網野 隆明

(あみの たかあき / 1956年3月14日生)

●推薦者 奥村一利

- 略歴：
 - 1982年 東京理科大学工学部建築学科卒業
 - 1997年7月 一級建築士事務所 有限会社 アルケドアティス開設、現在に至る
- 所信：微力ではありますが、関東甲信越支部との連絡役を責任を持って務めたいと思います。
- 推薦：網野君は、長く保存問題委員会で活躍し、設計活動においても、民家の再生、文化財の修復、再生、活用などの設計を多く手掛け、建築文化の向上に貢献しており、JIAの幹事に推薦します。(奥村一利)



長野地域会

西澤 広智

(にしざわ ひろとし / 1954年4月5日生)

●推薦者 山口康憲

- 略歴：
 - 1976年 日本大学理工学部建築学科卒業
 - 1976年 北野建設株式会社入社
 - 1978年 宮本忠長建築設計事務所入社、現在に至る
- 所信：長野地域会で長年まちづくり委員会に所属し、保存・まちづくりに関心を持って活動して参りました。また、現在山口代表のもと副代表を三期務めさせていただいています。この度、地域会の皆様からの推薦により、立候補することになりました。微力ではありますが、地域会の実情を踏まえ地域会の意見を集約し、地方と支部の橋渡し役として支部の発展に尽力したいと思います。
- 推薦：西澤さんは長野地域会発足当初からの会員であり、現在まで副代表を3期務められています。会員からの信頼も厚く、その豊富な経験と幅広い見識で広く地域会の運営に携わっていらっしゃいます。支部運営に関しても、県域の地域界との繋ぎ役として適任であり、ご活躍されるものと確信しています。(山口康憲)



中野地域会

白江 龍三

(しらえり ゆうぞう / 1952年1月24日生)

●推薦者 小池正人

- 略歴：
 - 1952年埼玉県生まれ
 - 日本大学大学院理工学研究科修了
 - (株)菅原建築事務所、(株)日本設計(フリーランスまたは嘱託)、(株)SDCを継いで1988年に(株)白江建築研究所設立、代表取締役就任、現在に至る。
 - 日本大学理工学部非常勤講師、前橋工科大学工学部非常勤講師、(株)日建設計代表付を継いで、現在前橋工科大学大学院非常勤講師
- 所信：今期1年間支部幹事として活動する中で、JIAや他の会員の方々の活動状況も分かり、今後の地域会活動推進の様々な可能性が見えてきたため、さらにもう一期的間、JIA支部幹事として活動に参加したい。
- 推薦：社会的に大きな評価を受ける公共建築を手懸けてきた経験より、まちづくりの大切さや建築家の責務を強く感じ、JIAとしてなすべき提案が出来る方です。継続となる新年度においても支部活動及び地域会との連携強化に尽力して頂けるものと期待致します。(小池正人)



三多摩地域会

木村 智

(きむら さとし / 1952年6月20日生)

●推薦者 山本和彌

- 略歴：
 - 1978年 早稲田大学大学院理工学研究科建設工学修士課程修了
 - 同 郵政大臣官房建築部入省
 - 2014年 日本郵政株式会社退社(2013年JIA入会)
 - 同 株式会社日本設計入社
 - 2016年 同退社
 - 同 株式会社ニッテイ建築設計入社
- 所信：JIA入会と同時に、三多摩地域会活動に参加しているところです。JIA関東甲信越支部と三多摩地域会との連携を図る役割を果たすため、努力していきたいと思っております。
- 推薦：経験を生かしてJIAの活動を支えていただける方です。また、三多摩地域の中で主要なメンバーとして活動に参加されています。ぜひ幹事をお願いしたいと思います。(山本和彌)



新宿地域会

佐藤 正己

(さとう まさみ / 1940年1月15日生)

●推薦者 小倉浩

- 略歴：
 - 山下寿郎設計事務所(山下設計)～杉重彦建築事務所を経て、1972年株式会社エア・ハイツ建築設計事務所設立、現在に至る
 - 新宿地域会会員 幹事 JIA関東甲信越支部幹事
- 所信：地元新宿地域会に所属し「新宿建築100景」編集のためエリアごとに街歩きをして、会員との親睦、交流を経て地域会活動に係わるきっかけとなった。また地元企業や商店街、大学とのイベントに参加することで、地域建築家としての役割も自覚した。支部と地域会とのパイプ役を果たすべく、微力ながら、地域会と支部の期待に応えていきたいと考えている。
- 推薦：佐藤正己会員は、新宿地域会発足以来地域会の中心的メンバーとして地域会活動に参加してこられました。新宿区に居住し、業務の拠点も区内ということで地域に密着した活動をするに相応しい立場におられます。地域会推薦のJIA支部幹事としての活動も既に半期のご経験もありますので、これらのご経験を基にJIAの支部役員として活躍頂くに相応しい経験とお人柄とを考えここに地域会を代表してJIA支部幹事に推薦申し上げます。(小倉浩)



城東地域会

杉山 英知

(すぎやま えいち / 1979年2月19日生)

●推薦者 岸成行

- 略歴：
 - 日本大学理工学部卒業
 - 武蔵野美術大学大学院造形学研究所修了
 - 設計事務所勤務を経て
 - スタジオエイチ一級建築士事務所主宰
- 所信：幹事を1期2年担いまして、少しはJIAの方向性がわかったように思います。もう1期続けることで、より深くJIAの活動にかかわればと思います。立候補をさせていただきます。
- 推薦：杉山英知さんは城東地域会の若手アクティブメンバーのひとりであり、学生デザイン実行委員会の委員長としても活躍される。学生卒業設計コンクール開催の中心メンバーであり、尽力されてきた。また、杉山英知さんはこれまでも、幹事として支部と地域会のパイプ役として活動された。そんな杉山英知さんを、城東地域会幹事として引き続き推薦したい。(岸成行)



文京地域会

三上 紀子

(みかみのりこ / 1964年9月10日生)

●推薦者 野生司義光

- 略歴：
 - 1988年 大阪市立大学生生活科学部住居学科卒業
 - 1988～1994年 堀林建築設計事務所、秩父建築設計事務所勤務
 - 1997年2月 レジオンデザイン一級建築士事務所開設
 - 2001～2007年 東京大学大学院修士課程修了、博士課程単位取得退学
 - 2004年10月 レジオン・コンサパティブ株式会社設立、代表取締役
 - 2010年～ 日本大学生産工学部創生デザイン学科非常勤講師
 - 現在に至る
- 所信：JIAに入会後、2010年より文京地域会の活動に参加し、地域での活動を通して、多くの建築仲間とのつながりを大切にしてきました。これまでも諸先輩方の温かいご指導によって様々な貴重な経験をさせていただき感謝しております。またこの度、幹事として会に貢献できる機会を与えていただき、皆様のお役に立てるようにさらに精進して参りたいと存じます。何卒よろしくお願ひ申し上げます。
- 推薦：三上氏は、私が代表を務める文京建築会のメンバーの一員として、文京建築会の設立当時より事務局で広報担当として日頃から精力的に活動してくれていました。質の高い建築設計への志も高く、ここに文京地域会の幹事として推薦いたします。(野生司義光)



渋谷地域会

菅原 賢二

(すがわら けんじ / 1951年1月25日生)

●推薦者 南條洋雄

- 略歴：
 - 京都大学工学部建築学科卒業
 - 東京藝術大学美術学部建築科修士課程卒業
 - 入江三宅建築事務所
 - 石本建築事務所を経て(株)菅原賢二設計スタジオ設立
- 所信：建築設計を天職とした人間には、美しく且つ安全な街作りに対して責任があると考えます。この考えを持ってJIA渋谷地域会やJIAの活動に参加し地域の街作りに貢献したいと思っております。
- 推薦：菅原さんは渋谷地域会の創設時からのアクティブ会員です。これまでに地域会の会計を長年担当くださり、さらに前期より渋谷地域会卒の支部役員としてご活躍いただいています。このたびは、重任を快諾してくれました。渋谷地域会の会員皆が、菅原さんの関東甲信越支部の役員としての活動をご支援する気持ちで、ご推薦しております。建築家として、またデザイナーとしての菅原さんの素晴らしい資質は、いまのJIA支部にとって大きな力となると思います。(南條洋雄)



目黒地域会

棚橋 廣夫

(たなはし ひろお / 1939年10月1日生)

●推薦者 木村丈夫

- 略歴：
 - 1963年3月 日本大学理工学部経営工学科建築専攻卒業
 - 1963年4月～1965年6月 大江修設計事務所勤務
 - 1965年10月～1966年6月 ダニエル・マン・ジョンソンアンドメンデンホール設計事務所勤務
 - 1966年8月～1968年9月 レオ・ウラス設計事務所(スウェーデン)勤務
 - 1969年10月 (株)エーディーネットワーク建築研究所設立代表取締役、今日に至る1969～79年 日本大学生産工学部建築工学科、1990～96年日本大学理工学部建築学科講師
- 所信：2014年4月より2016年4月まで目黒地域会代表に就任、現在同地域会顧問を務めさせていただいております。又、目黒区の景観アドバイザーにも就任致しておりますので地域活動を通してJIAにも貢献できるよう頑張りたいと思います。
- 推薦：目黒地域会2016年第11回定例会(2016年12月13日開催)において、2017年度関東甲信越支部幹事改選候補として当地域会所属の棚橋廣夫氏を選出致しましたので推薦いたします。(木村丈夫)



自由枠

市村 宏文

(いちむら ひろふみ / 1966年5月12日生)

●推薦者 藤沼 傑、高階澄人、宮地洋樹

- 略歴：
 - 1989年日本工業大学建築学科卒業
 - (株)CORE建築都市設計事務所、(株)瑞設計研究所を経て、1997年エルスト一級建築士事務所設立
 - 2000年(株)エルストに改組
- 所信：二期目となりますが、入会10年の節目を迎えます。次の世代へつなげる会へ、しっかりと協力してまいります。
- 推薦：市村さんはJIAで長年広報を担当されてきました。若手ながら、JIAを熟知しており、今後のJIAに対しての方策を具体的に提言できる見識を持っています。(藤沼 傑)



自由枠

山下 祐平

(やました ゆうへい / 1977年10月3日生)

●推薦者 飯田善彦、宮地洋樹、藤沼 傑

- 略歴：
 - 2001年3月 日本大学理工学部建築学科卒業
 - 2003年3月 日本大学大学院理工学研究科博士前期課程(建築学専攻)修了
 - 2003年～2010年 株式会社仲亀清進建築事務所
 - 2010年～ 株式会社飯田善彦建築工房
- 所信：建築家の仕事が多様化するいま、他業種とのつながりを大切に、広がりのある職能として実践していくことが大切と考えます。他者との連携を充実させながら、プロフェッショナルとしての社会貢献活動をしていきたい所存です。
- 推薦：山下祐平さんは、新進気鋭の建築家です。自ら、デザインを切りひらくだけではなく、多分野の専門家を取りまとめる能力が非常に高い。JIA幹事にうってつけの人材でしょう。これからの活動に期待しています。(飯田善彦)



自由枠

宮地 洋樹

(みやじ ひろき / 1965年8月27日生)

●推薦者 藤沼 傑、上浪 寛、渡邊 太海

- 略歴：
 - 1989年3月 千葉大学工学部建築工学科卒業
 - 1989年4月 大宇根建築設計事務所入所
- 所信：2015年より支部総務委員会において会員拡大などの課題に取り組んでいます。それらの解決にはJIAの意義と魅力を多くの会員が共有し、また様々な活動とその成果を外に向けてわかりやすく発信していくことが何より有効だろうと感じています。微力ながらも少しでもお役に立てれば幸いです。よろしく願い致します。
- 推薦：宮地さんは総務委員会で長年会員拡大等に尽力されています。名誉会員大宇根氏の事務所にて、建築家のあるべき姿を実践しています。今後のJIAには不可欠な人材であり、推薦します。(藤沼 傑)

監査候補者



赤羽 吉人

(あかはね よしと / 1949年4月5日生)

●推薦者 藤沼 傑

- 略歴：
 - 1973年3月 早稲田大学理工学部建築学科卒業
 - 1973年4月 (株)林魏建築設計事務所入社
 - 1998年11月 (株)林魏建築設計事務所代表取締役就任、現在に至る
 - 2008年5月～2012年4月 JIA関東甲信越支部長野地域会(JIA長野県クラブ)代表
 - 2010年4月～2015年6月 JIA関東甲信越支部副支部長
 - 2011年5月～2015年6月 JIA理事
- 所信：長野地域会での活動に軸足を置き、関東甲信越支部副支部長並びにJIA理事として、地域会の実情や地方の意見を支部活動・本部活動に反映させる役割を担ってきました。JIAは現在、会員数の減少という大きな課題を抱えており、新会員の加入促進は急務ではありますが、同時に、公益法人の組織としてのガバナンスを保ちながら、地域会・支部・本部がお互いに連携してそれぞれの役割を果たしていくことが求められております。そういった環境下で、これまでの活動の実績を生かした大局的判断を下せる監査として活動を行いたいと考えています。
- 推薦：赤羽氏はJIA長野県クラブの代表を務めた後、関東甲信越支部の副支部長として2期4年を2010年から2014年まで務めました。この間、公益社団法人としての規約類の整備、支部予算、JIA全国大会横浜など、副支部長として大変に尽力されました。JIAが公益団体として活動するために必要な公正な価値観を堅持しており、監査としての最も重要な資質をその活動に発揮しています。以上により、関東甲信越支部の監査として推薦します。(藤沼 傑)

■ 海外レポート(自薦、推薦)

海外レポートは、海外で活躍されている方から、その国の建築に関わることについて紹介しています。海外との交流や国際会議、見本市などの参加報告でも結構です。自薦、推薦どちらでも構いません。ぜひ編集部へご連絡ください。

- ① 文字数 2,500文字程度(2頁)
- ② 写真、図版 2～3点程度(JPEG形式)
- ③ 執筆者の顔写真(JPEG形式/白黒での掲載になります)
- ④ タイトル
- ⑤ 図版キャプション
- ⑥ お名前、事務所名、電話番号、E-mail

■ 他人の流儀(推薦や話を聞きたい人)

連載中の「覗いてみました他人の流儀」について会員の皆様からのご意見を募集しています。この人に聞いてほしいという実名でもかまいません。老若男女を問わず、どんな業種でもアタックしたいと思います。ご意見を編集部へお寄せください。

- ① インタビューをしてほしい方の実名
- ② インタビューをしてほしい方の業種や分野など

■ 募集コーナー(会員に向けての告知や募集など)

巻末に会員の意見を掲載する「声」のコーナーを不定期に設けています。建築に関すること、JIA のこと、告知や募集など、どんなことでも構いません。皆様の自由なご意見をお寄せください!

- ① 文字数 500文字程度まで(1/4～1/2頁ほど)
- ※掲載の可否、掲載の時期は、広報委員会に一任願います。

■ ひといき(投稿)

巻末に、建築・美術・音楽・本・旅・映画など、さまざまな話題をコラムでご紹介しています。硬派な論評でも結構ですが、タイトル通りの気軽な感想も大歓迎です。会員の皆様からの投稿をお待ちしております。

- ① タイトル、サブタイトル、見出し、クレジット等部分100文字以内
 - ② 本文、400文字以内(テキスト形式)
 - ③ 記事に関する写真を1～2点(JPEG形式)
- ※なお、執筆者の顔写真は掲載しません。

■ 部会活動報告、地域会だより

部会と地域会の記事を随時募集しています。「地域会だより」は毎号2つの地域会に順番で原稿をお願いしていますが、部会はこちらからお声かけをしていません。部会、地域会ともに、興味深い活動報告などがありましたら、ぜひ編集部へご連絡ください。

- ① 文字数 1,200～1,800文字程度(1頁)
 - ② 写真や図版1～2点(JPEG形式)
- ※掲載時期は広報委員会に一任願います。

■ 『Bulletin』へのご意見・ご要望をお聞かせください

『Bulletin』はこれまでアニュアル号を含め年間7号を発行してきましたが、新年度から年間4号の季刊発行に変わります。年間の発行号数を削減する代わりに毎号のページ数を増やし、内容の一部の見直しや、新たな企画も加え、より充実した支部の広報誌面にする予定です。

そこで、新しい『Bulletin』の内容について、会員の皆様のご意見・ご要望を、編集部までぜひお寄せください。お待ちしております。

■ 投稿・ご意見・ご要望受付、お問い合わせ先

JIA 関東甲信越支部事務局 大西
E-mail : mohnishi@jia.or.jp
TEL : 03-3408-8291 FAX : 03-3408-8294

「沈黙 —サイレンス—」

映画界の巨匠、マーティン・スコセッシ監督が念願の企画の映画がベールを脱いだ。原作は、戦後日本文学の最高峰と称される遠藤周作『沈黙』。世界20か国で翻訳され、「神と人間」という根源的なテーマに迫った名作小説だ。原作発表から50年、2016年は遠藤の没後20年、スコセッシが原作に出逢ってから28年の時を経て、完全映画化を果たした。

舞台は17世紀、江戸初期の長崎、激しいキリシタン(切支丹)弾圧の中で棄教したとされる師(フェレイラ)の真実を確かめるため日本にたどり着いたポルトガル人の若き宣教師。その目に映った想像を絶する日本人信徒たちの惨状。西洋と東洋の断絶を超え、人間にとって本当に大切なものは何かを問いかける。信仰とは？ 人を救うとは？ 究極の選択。壮大なドラマを映像美で表した大作である。

このプロジェクトを実現するためにハリウッド、日本から豪華キャストが集結した。アンドリュー・ガーフィールド(ロドリゴ神父)、リーアム・ニーソン(フェレイラ神父)、アダム・ドライバー(ガルベ神父)、日本からは「キチジロー」に扮する窪塚洋介、通辞〜浅野忠信、井上筑後守〜イッセー尾形、他

にも実力派が参加。脚本、撮影監督、プロダクションデザイナー、編集は、スコセッシの信頼の厚いハリウッドのスタッフが参加している。

内容についてはあまりにも鮮烈な印象で言葉もない。何かに打ちのめされたという思いでいっぱいです。棄教したフェレイラ師とロドリゴ神父の対面の場は圧倒的な大迫力場面です。ロドリゴ神父と井上筑後守+通辞の対決も大きな見せ場です。上映の中で英語の会話がどんどん出てきます。

皆様これは映画史に残るものだと私は思っております。ぜひとも鑑賞されることをお勧めします。本日(1月24日)、撮影賞でアカデミー賞にノミネートされました。

主はおっしゃった「世界に赴き 全ての者に 教えを授けよ」
主よ あなたは何故 黙ったままなのですか——

(「沈黙」映画プログラムより)

(立石博巳)

私のひな祭り

■我が家は息子二人なのでひな祭りにはトンと縁がありません。カミさんもお雛様より白酒とひし餅のクチで…。 (上原)

■お雛さんを飾る——気が付けば、大学生になった娘の出生時や幼少期を思い出す、数少ない機会かな。 (高橋)

■端午の節句は子供の日。ずるいね、女子。2回もお祭り。僕は欲張りで、自分の木履(ボックリ)を持っている。小石の傷があるから履いたに違いない。前に住む女の子が持っているのがうらやましくおねだりしたのだ。 (倉島)

編集後記

■有名な勝浦市のビッグひな祭り。幼い娘を連れて一度行こうと思っていたが、中学生になってしまった今は部活が多忙で行く暇もない。今年はせめて久しぶりにひな人形を飾ろうか。 (八田)

■久しぶりの再会を果たしたお雛様。顔が命の〜とだけあり、美しさはかわらない！これからは、娘のお雛様となり、私も準備する側へ。ひな祭りの良い思い出が増えますように。 (浦)

■長野県須坂市にある世界の民俗人形博物館の雛壇は毎年圧巻です。今年も素敵に飾られている様子を写真ですが拝見し、とても感動しました。 (長澤)

編集 : 公益社団法人 日本建築家協会
関東甲信越支部 広報委員会
委員長 : 高橋隆博
副委員長 : 八田雅章
委員 : 倉島和弥・小山将史・長澤 徹・中山 薫・上原和彦・
吉田 満・清水裕子・浦 絵美
編集長 : 八田雅章
副編集長 : 長澤 徹
編集ワーキングメンバー : 倉島和弥・市村宏文・立石博巳・小山将史
中山 薫・浦 絵美
編集・制作 : 南風舎

Bulletin 268 2017.3
発行日 : 平成29年2月15日
発行人 : 浅尾 悦子
発行所 : 公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部
〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 2-3-18 JIA館
Tel : 03-3408-8291(代) Fax : 03-3408-8294
印刷 : 株式会社 協進印刷

■ JIA 関東甲信越支部関連サイト一覧
・ (公社) 日本建築家協会 (JIA) <http://www.jia.or.jp/>
・ 建築家 online (一般向け) <http://www.jia-kanto.org/>
・ JIA 関東甲信越支部 (会員向け) <http://www.jia-kanto.org/members/>

この国の四季がなければ、生まれなかった窓。

LIXIL
Link to Good Living



リクシルの窓「サーモスX」SAMOS X

住まいの断熱を邪魔しているもの。それが、窓などの開口部だ。断熱性だけを追い求めるのであれば、それに適した素材を使えばいいことはわかっていた。ただ、日本には四季がある。寒暖差、暴風雨、強い日射などに対する“耐久性”も高める必要があった。辿り着いた答えは、適材適所。室外側には、強度や耐久性に優れた“アルミ”を。室内側には、断熱性に優れた“樹脂”を。アルミと樹脂のハイブリッド構造を極めることで、最良の窓を目指した。実験と検証の日々。その高性能な窓が完成するまで、じつに2年以上もの試行錯誤がつづいた。“そこまでやるか”を、とこまでやるか。快適さと安心を両立させたリクシルの窓「SAMOS X」は、樹脂窓ではなし得なかった美しいデザイン性さえ兼ね備えている。

MADE *By* LIXIL.

それが、リクシルのものづくり。



の技術は、LIXIL へ。